

督促狀を出して

更に利子未納を取立

低利資金の償還ぶり

銀行員から町收入役に鞍かへした瀧貫一君

は七日からよいよ就任した。田中收入役の死んでからは兎角ほこりのなり勝であつた

收入役の席の机も綺麗に拭かれて、納稅原簿

さか、ボテが二つ三つ重ねてある。

「どうです、收入役の感想は」云へば、何

もない、云つてしまひに役場の大福帳式帳

簿の洋帳に比し不便なを嘆する。

私もいよ／＼收入役をお受けしたからには

ふ迄もない。六月が町の病たる低賃の償還

期だから、先づ之に對する態度を決する、

なあに田中元收入役さんには斗酒なほ辭せず

の悔があれば、私は日露戰争に出征して

旅順の玉の音を頭の上に聞いた尊い経験が

ある、今年こそビシ／＼取り立てる心算で

ある、債務者諸君には御氣毒であるが引受けた以上は性分として徹底的にやらねば私は氣がすまぬ方だから……まあ見てみてく

けた以上は性分として徹底的にやらねば私は氣がすまぬ方だから……まあ見てみてく

その後の低賃

六十五口償還

その後の低賃金は本月を待つて全額償還

者は六十五口に達し金額は十六萬七千二百十

圓である。しかし債務者總數四百八十七口、

信用一〇二擔保三八五)に比すればまだ四百

二十二口未納者があり、之等は今一步努力し

て規定通り集めて、清算すべき性質の物で全

額償還などてやつてやりくり算段で去年の分

を償還などは、来るべき六月の大掃除に如何

なる困難を伴ふばかり知れぬわけである。

本年六月末四十五萬圓餘の償還こそ一に町の

危険千萬と云はねばならぬ、償還期が來て騒

ぎ廻つてもそれは究竟する事な述べて取へ

て監視のため事ある事を述べて取へ

上げると共に眠れる當事者の奮起を促す次第

である。

全額償還者

(十二月中の全額償還

者は五人で姓名は左

瀧氏後任決定

十二銀行元支配人代理瀧貴一氏は此程町收入役に推選されて同行を離任したのでその後任として爲替係主任であつた田中清氏支配人代理に昇進した。

錦城校三四會の

謝恩慰靈會

明治三十四年の春、錦城高等小學校を卒業した人達によつて三四會なる同窓團体が出来てゐるが、本年は卒業後三十年に該當する

者云ふので當時教師たりし人々を招待して謝恩會を開くと共に、また一方には亡師友の爲めに追悼會を厳修し併せて相互の親睦を厚うせんが爲め、去る三日、謝恩慰靈會が催された。

同時に教師にして招待されたる人々は瓜生余所吉(金城高女教頭七十二歳)萩原萬太郎(圖書館司書七十一歳)西村友幾(大聖寺

六十歳)山崎卯之吉(合同運送會社長、五十

八歳瀧川準(無)瀧永長天郎(在京都小學校長、廣田百豐(在京都畫家)の八氏にして

其の中、福永、廣田の兩氏は欠席された。い

ま其の次第を記せば三日前午十時より藩政記念室に於て謝恩式舉行、終つて江沼神社に参拜の上、記念撮影、午後一時より荒町慈照寺運動を起した事は周知の事實であるが、その

後東京や京都、金澤に遊學中の學生が正月休みや、暑中休暇に歸郷の折花火練香の様に火の手を上げるに過ぎないが、今度レンカ堂の坂井校長を援助して、深き前の恩儀にむくゆた恩儀を爲して福商の同窓生で當町在留人を集め福商同窓會大聖寺支部を起し徹底的に運動を起した事は周知の事實であるが、その

矢田屋旅館に至り懇親會を開き、老年、壯年

の一同が丸で三十年も若返つた氣持になつてメートルをあげ、其の夜は同家に一泊して翌

受難時代に遭遇したわけである。目下の處殘留組は飽迄やるを語つてゐる。

君共元老株といふから離退するのかも知れぬ

のが、果して今後の一聲會は頭株を抜き去ら

れてうまく修まつて行くかどうか大きな疑問

が、此程その頭株である、中村與三市、

八歳瀧川準(無)瀧永長天郎(在京都小學校長、廣田百豐(在京都畫家)の八氏にして

其の中、福永、廣田の兩氏は欠席された。い

ま其の次第を記せば三日前午十時より藩政記

記念室に於て謝恩式舉行、終つて江沼神社に参

拜の上、記念撮影、午後一時より荒町慈照寺

に於て追悼會執行、それより直に片山津温泉

矢田屋旅館に至り懇親會を開き、老年、壯年

の一同が丸で三十年も若返つた氣持になつてメートルをあげ、其の夜は同家に一泊して翌

受難時代に遭遇したわけである。目下の處殘

一聲會より

頭株脱退

君共元老株といふから離退するのかも知れぬのが、果して今後の一聲會は頭株を抜き去ら

れてうまく修まつて行くかどうか大きな疑問

が、此程その頭株である、中村與三市、

八歳瀧川準(無)瀧永長天郎(在京都小學校長、廣田百豐(在京都畫家)の八氏にして

其の中、福永、廣田の兩氏は欠席された。い

ま其の次第を記せば三日前午十時より藩政記

記念室に於て謝恩式舉行、終つて江沼神社に参

拜の上、記念撮影、午後一時より荒町慈照寺

に於て追悼會執行、それより直に片山津温泉

矢田屋旅館に至り懇親會を開き、老年、壯年

の一同が丸で三十年も若返つた氣持になつてメートルをあげ、其の夜は同家に一泊して翌

受難時代に遭遇したわけである。目下の處殘

石川縣本金庫

株式加洲銀行

大聖寺支店

電話一六二番

電略(ヤマニ)又ハ(三)

大聖寺町三ツ屋町

石川縣大聖寺本町

電話長一一二番 電略ガノ

株式会社

北陸企業銀行支店

電話二〇五番 電略ホセ

石川縣大聖寺町本町

電話二一五番 長一一番

電略ホセ

石川縣大聖寺町鍛冶町

電話一四九番 電略カノ

会社

草鹿大佐の外遊

海軍大佐草鹿任一氏は戻國のため新春早々

夫入り令妹、令息同伴に歸省された。尙ほ聞

くこところに依れば同氏は其の筋の命により三

月中旬東京出發、外遊の途に上り主として歐

洲各國の海軍その他のに就いて視察を遂ぐる由

風邪人自らをつむり居る祈るこそ

聖城佛壇

冬季雜詠 林山々

晴れし空に冬木かたき幾々ころ

風に消さじと覆ふ掌のぬくし冬灯

枯菊に乾らぶ山 一つ見し

一家悉く健在して開闢の幸福に浸り乍ら、

勵務の關係上久しく郷地を離れ金弟も亦同

郷の境遇なる爲め、朝夕侍して充分の孝養

をも盡し得ず、從つて郷土に對する祖公も

亦殆んど出來ないのは誠に申譯なき次第で

ある。今此の記念すべき祝壽を迎ふるも、

近親の多くは他鄉に四散し一堂に相會する

ことをも難し得ず、加ふるに世を擧げて緊縮

を叫ばれつゝある際なれば單に一夕の賀筵

を張りて刹那の歡な呼ぶの意義少なきを思

ひ、茲に我家創始以來の家系並に祖考祖

父母の累傳さ其の遺著を叙述し併せて

處世の教訓を始め社會奉仕の事蹟、旅日記

和歌、俳句其の他相識、知己の断簡零墨を

編みて「思出草」となし、親戚朋友に頗つ

て其に永く子孫に對して規範の資たらむこ

とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

走る」とある。古語に曰く「身を立て道を

最初の立会はまちくに開催され、今年は日曜にて六日となり、成績よく五萬五千円で、立会を示して現地を離れて、現物の好買行を目さす。

初春の人氣はわかつず

初賣は至極閑散を告ぐ

生糸標準相場

(千貫建)

器械十七中綿

特價

最優

優等

最優

一九三二年の階音

新春めでたき風景

「汝疑ふべからず」

自動車と軍人

或る處に、正七位をもつてゐる閑職中尉が

もうそれ以上進級する詰合のないその軍人は

さう思つてあきらめてゐる變り、つさめて、

正月はもう五十過ぎで、いくらく撫慰しても

お正月であつた、少し風が、雪の來そうな

冷たさをひんで、街頭をなめ廻してゐた。

電線は時々うなり、犬は手毬の機にころげ

廻つてゐた。自動車が通る、その外はほん

ご乗物は見ゆない。元旦は皆心からゆづくり

休んで、来るべき三一年の準備をしてゐるの

であらう、軍人は別な事を考へながら、こんな事をふ

つと思つた。これはいゝ人間、毎日てんて

こ參ひでは行説ばかりだ、せめて、この元

旦とお正月の三日間だけは、ゆつくりと行末

を思惟し、過去を反省し、不正を正し、弱き乞食や浮浪人をめぐまねばならぬ。

つてゐる中尉の奥さんが悠然とふんぞり返

つて、若い會社員風の男を片方に乗せてゐる

ではないか。中尉は最初自分の目を疑つたがやがて、そ

れが自分の錯覚でない事ははつきりと判つて

来た。

「う……」中尉は物を云はうとしたが、の

う迄出で止つてしまつた。中尉の頭はすつかり

リカシくになつてゐた。やつと元旦に済めた誓が、半分程ゴタくに毀れそうな氣がし

たのだ、この野郎、云ふなり、早くか

年賀は廻らなかつた。そして道々離縁、離縁

ではないか。玄關で何を仰言つてゐるのでござ

いません」

「いや、今しがたお前が自動車で行かなかつ

つた。そしてトボ／＼ささむ／＼した顔つき

ほんとうに中尉の頭はすつかり冷ひ切つて

判斷する能力を失つた様にほんやりしてしま

つた。そしてトボ／＼ささむ／＼した顔つき

で我家へ歸つて行つた。

(逸木俊郎)

第三話

疑ふ勿れ

氣分のクシャ／＼する時は、それを押して

物事をなしたつて、決してそれはロクな事な

りカシくになつてゐた。やつと元旦に済めた誓が、半分程ゴタくに毀れそうな氣がし

たのだ、この野郎、云ふなり、早くか

年賀は廻らなかつた。そして道々離縁、離縁

ではないか。玄關で何を仰言つてゐるのでござ

いません」

「いや、今しがたお前が自動車で行かなかつ

つた。そしてトボ／＼ささむ／＼した顔つき

ほんとうに中尉の頭はすつかり冷ひ切つて

判斷する能力を失つた様にほんやりしてしま

つた。そしてトボ／＼ささむ／＼した顔つき

で我家へ歸つて行つた。

け出したのも無理はない……しかし、遠ざか

る、／＼、自動車は悠々遠く、小さく、なつて、遂に中尉の視界から消え去つた。——胸

蓋の悪い。さては妻の野郎、人を甘く見て若

い奴ミチ／＼カモ／＼の場面を見せつけて

行つたな……、斷然、離縁だ――

ほんとうに中尉の頭はすつかり冷ひ切つて

廻つてゐた。自動車が通る、その外はほん

ど乗物は見ゆない。元旦は皆心からゆづくり

休んで、来るべき三一年の準備をしてゐるの

であらう、軍人は別な事を考へながら、こんな事をふ

つと思つた。これはいゝ人間、毎日てんて

こ參ひでは行説ばかりだ、せめて、この元

旦とお正月の三日間だけは、ゆつくりと行末

を思惟し、過去を反省し、不正を正し、弱き乞食や浮浪人をめぐまねばならぬ。

自分が第一のゆづくりを毎日闇で思惟

出來るその中尉は、こう思つてそれを廢めな

く心は、みじんもつてはいけない。

お正月だけは人をねんだりそれなんたりす

けねばならぬ、と考へてゐた。

お正月だけは人をねんだりそれなんたりす

だがれ」

「あら嘘でございませうよ、私まだ一度も家

を出ませんのよ」

そこへであつた……一臺の自動車が止つた

中尉の家の前へ――

中尉の妻君は止つてしまつた。中尉のやはり見

に、谷屋モスリン店主、島崎ラヂオ主人らが

大自動車の中の妻君で、先刻の若い男も同伴

約七十坪が町へ移管になつたから、運動場が

大分廣がるさいで運動をやらせたい現在で

る。病氣退學などがちよい／＼あつたりする

からこれ根絶せしめるべく幸に元の寄宿舎

約七十坪が町へ移管になつたから、運動場が

から到底満足の演技の出来る道理がない。冬

は幸に射撃は高位を持ち續け去年の如きも運

手十五人五五三點、一人當り七、三七三云ふ

好成績を示した。之を丸師團平均五、四四に

お正月だけは人をねんだり、それなんたり

する心は、みじんも持つてはいけない。

と彼はしも／＼思つた。そしてあくまで

年賀は廻らなかつた。そして道々離縁、離縁

ではないか。あつ――。中尉殿はまよつて、

後なふりかへつた、そこにはたしかに自分の

家の妻君がある、はて不思議――

たがい、たしか若い男と一緒に思ふ

だがれ」

「あら嘘でございませうよ、私まだ一度も家

を出ませんのよ」

そこへであつた……一臺の自動車が止つた

中尉の家の前へ――

中尉の妻君は止つてしまつた。中尉のやはり見

に、谷屋モスリン店主、島崎ラヂオ主人らが

大自動車の中の妻君で、先刻の若い男も同伴

約七十坪が町へ移管になつたから、運動場が

から到底満足の演技の出来る道理がない。冬

は幸に射撃は高位を持ち續け去年の如きも運

手十五人五五三點、一人當り七、三七三云ふ

不景氣で今年の正月は、(龜の子正月)である

▲さてそれを敢破つて文字通り一

九三一年の尖端を歩もうと乾町の能勢歯科醫

院に入つて首だけ布團から出してゐる事であ

る▲さてそれを敢破つて文字通り一

大聖寺町寺町

計見醫院

澤田眼科醫院

大聖寺町荒町

能勢齒科醫院

大聖寺町鷹匠町

七五三診療所

大聖寺町弓町

森定吉

大聖寺町本町

松江齒科醫院

大聖寺町金子

大聖寺町魚町

大聖寺町仁

大聖寺町井上耕也

大聖寺町井上耕也

大聖寺町牧野政吉

大聖寺町牧野政吉

大聖寺町内兒科

大聖寺町那谷一

院主

能勢季三

澤田田税

森定吉

大聖寺町弓町

七五三診療所

大聖寺町那谷長次

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一

大聖寺町那谷一